

# 校長室から

令和2年10月9日

保護者の皆さまへ

## 1学期が終了しました

### 思春期の子どもたちと一緒に生活して思う事

2ヶ月遅れで始まった令和2年度の第1学期が終了しました。5月末の予備登校では、どの学年の生徒も、とても堅い雰囲気、静まりかえっていました。久しぶりの登校で、とても緊張していたようでした。私たち教職員もかなり戸惑いました。心配になり、宮城県でも著名な臨床心理士の先生に相談したのが、ずっと昔の事のような気がします。その時、心理士の方から「校長先生、3ヶ月も休んでいたのだから、それが当然の反応です。変に元気が良いほうが心配ですよ。長町中の生徒の反応が、正直な反応なのです。少しずつ、焦らずに、急がせずに進んで下さい。共に歩むといった堅苦しい雰囲気ではだめですよ。生徒と一緒に歩いてください。保護者の方とも一緒に歩いてください。1つの方向にゆっくり進んでください。生徒を無理に導こうとしたり、強引に進もうとしたりしてはいけません。」心に染みた言葉でした。

教職員で何度も話し合い、午前授業から1週間をスタートさせました。少しずつ学校生活のリズムを取り戻させようとしてきました。生徒の疲労も考え、4時間授業もほんの少しではありますが設定しました。生徒達の一番身近にいる学年の先生や担任の先生方からの強い要望でした。

彼らの表情も少しずつ明るくなりました。しかしながら「ウィズ・コロナ」「新しい日常」等のフレーズに戸惑いながらの先が見えない日々でもあり、感染の恐怖は今もありますし、当時よりも確立的に高くなっているような気がします。

それでも、本校の生徒達は、「新しい生活」に慣れようとして、検温、手洗い、消毒、マスクの生活を繰り返し、それを日常にしていこうと努力してきました。他の学校よりもずっと多く的人数がいて、校舎もそれほど大きくないという事も彼らはしっかりと心の片隅で意識できています。

学校が始まった当初「当たり前の大切さ」に気付いたものの、それは少しずつ慣れに変わり、気が緩んでくる場面も多々ありました。しかしそれは、大人でもそうです。毎日毎日緊張の日々は続きません。それでも私は、彼らと生活しながら「中学生が最も新型コロナウイルスに対して注意深く生活しているのではないか」と思う時があります。

この4か月、長町中学校の生徒たちが、無事に学校生活を送れた事を保護者の方々、地域の方々、そして私たち教職員全員で喜びたいと思います。体育祭や合唱祭でも感じていた事ですが、彼らの振る舞いから「この時間を大切に過ごそう」という意識が強く感じられました。とても嬉しく思います。それだけに感染してしまった時は、絶対に誹謗中傷はあってはならないと考えております。「助け合い」の精神を目に見える形にしていきたいと思います。

さて、本日、お子様方に、担任から通信票を配付しました。1年生は、初めて教科の評定が5段階で示されます。思った以上の評価が得られた生徒、自分の目標を達成できた生徒にとっては、十分満足できるものであると思います。どうか心からお子様を誉めてあげてください。

しかしながら、なかなか思ったような評価が得られなかった生徒にとっては、保護者の方々に成績表や通信票を手渡すという事は、勇気がいる事で、大きな負のエネルギーを使います。私たちも仕事上であまり上手くいかなかった時、失敗してしまった時、思ったように成績が上がらなかった時は、上司と会話したくない場合もありますし、私も、本校の職員に自分の出来ない事を知られた

くないという気持ちがあります。(しかし、本校の教職員にはバレバレですが・・・)

人間は、どんな年齢になっても自分の苦手な部分や恥ずかしい面を見られたくないものだと思います。「出来ない事を知られたくない。」「こんな事もできないのかと思われたくない。」「出来ている自分を見せたい。」そのギャップに悩みます。ましてや中学生は多感な時期です。一番身近にいる保護者の方々には、見せたくない自分があるはずで、だから時々、様々な方法で自分をよくみせようと背伸びしてしまいます。それは多くの若者が経験します。

ご存じのとおり、通信票の評定の数値は、教科への取り組みに対する結果であって、人間の価値を決める数値ではありません。生徒がその結果をとおして、何が出来て、何を苦手としているのかを理解し、何をどのようにしていくとよりよく生きていく事ができるかを知るツールの1つです。しかしながら、現実には、この評価の結果を参考にして高校入試というシステムに活用されるのもまた確かな事です。だから、日本中の今を生きる生徒たちも、私たちも結果を見るたびに苦しんできました。私たちは大人として、かつて同じ苦しさを味わったものとして、経験してきた人間として、今一度その事を思い出し、「もっと頑張りなさい。」「どうしてこんな成績なのか。」「お兄ちゃんはあるのに・・・」等だけではない声掛けが必要なのだと思います。それは私たち、教員も深く考え、子どもたちに寄り添い、実践していきたいと思えます。

偉そうに書き続けましたが、ちょうど私の二人の息子達が中学生時代には、そのように声掛けしたり、冷静に話したりする事はできませんでした。二人とも私に通信票を差し出すのをためらっていました。二人で相談して、一緒に私に見せていました。「一緒に出せば怒りが二分の一になると思った。」と今は笑いながら話していますが、当時は、その場をどのように切り抜けるか、どのように言い訳するか必死だったそうです。そんなに怒った記憶はないのですが、息子達の捉え方は異なっていました。必死の親の説諭や思いは、なかなか通じないもので、心配すればするほど距離は遠くなり、気まずい雰囲気が続きました。部屋にこもり、私が帰宅すると、さっと自分の部屋に「逃走」していきました。何日も顔を合わせない日もありました。そうなればそうなる程、私の怒りは高まり、さらにヒートアップして、親の思いは空回りするのみでした。たまに部屋からゲームをする音が聞こえ、廊下から「ゲーム終わりの時間だろう」と声を掛けると「なんだよ。今、止めようと思っていたのに。勉強する気がなくなった。」と言い訳を繰り返していました。

今、彼らに「どうしたらよかったのか？」と問いかけてみると「そっとしておいてほしかった。それが一番だったと思うよ。」と顔を見合わせて笑っています。子育ては難しいです。「子育ては親育ち」といった言葉がありますが、まさしく、子どもを育てながら、親も成長していくのだと思います。

それぞれのご家庭の教育方針があると思いますが、どうか、このコロナ禍で4ヶ月もの間、制約多き生活の中で登校し、明るく振る舞い、本日、家に戻ってきた事に関しても大きな価値を見いだしてあげてください。どうぞよろしく願いいたします。みんな頑張りました。コロナを言い訳にするのではなく、本当にみんなよく頑張りました。様々な不安や苦しさを経験しながら「生きる力」を身に付けていると思えます。

私の公私に渡る恩師がいつも言っていました。「子どもと接する時、田んぼと一緒に入ってはだめだ。それは子どものグラウンドだ。子どもが泥にはまってしまったら、一緒にいるとお前も同じように身動きが取れなくなる。あぜ道をそっとついて行きなさい。そして子どもが助けを求めるサインを出したら、飛び込んで助け出すんだよ。それが大人の仕事だ。」今、なんとなく理解できます。心に響く言葉です。

長町中学校の素晴らしき生徒たちが、また2学期、笑顔で戻ってくる事を楽しみにしております。